

完璧な紳士「三幕」

モリエール 原作

サマセット・モーム 脚本

(田原 創 訳)

登場人物（登場順）

音楽の先生

ダンスの先生

ジュールダン氏（「完璧な紳士」）

従僕数名（ジュールダン氏の召使）

歌手数名

作曲家（ジュールダン氏の庇護を受けている）

フェンシングの先生

哲学者

仕立屋

仕立屋の助手四人

ニコル（小間使い）

ジュールダン夫人（ジュールダン氏の妻）

ドラント伯爵（ドリメーヌ侯爵夫人の恋人）

ドリメーヌ伯爵夫人（魅力的な未亡人）

コック数名

第一幕

場面…ジュールダン氏の家の応接間。

幕が開くと——スピネット（小型のチェンバロ）が弾かれている。

ぶつきらぼうでざつくばらん音楽の先生と、テーブルに着いて楽譜を書いている弟子。

ダンスの先生登場。

音楽の先生 どれどれ…いいね。「弟子に」

ダンスの先生 新しい曲ですか？

音楽の先生 ええ、セレナーデ用のメロディーで、あの旦那が目覚めるのを待っている間、

弟子に作らせていたんです。

ダンスの先生 見せていただいてもいいですか？

音楽の先生 あの旦那が来たら、歌詞付きで聴けますよ。すぐ来るでしょう。

ダンスの先生 今ここで何もやることがないからといって、不満は言えませんか？「軽くステップ」

音楽の先生 ええ、そうです。我々は望みどおりのタイプの人を見つけただんですよ。ジュールダン氏は我々にとっていい金ずるですし、あの旦那が思う上品さと優雅さ

を持ったレディーたちがついてきます。世界中があのだんなみたいだったら、おたくの飛び跳ねごっこやうちの奇妙な楽譜にとってよろしいんでしょうがねえ

ダンスの先生 それじゃ足りません。あの旦那のためにも、我々が授けているものについてもうちよつと理解してもらいたい。

音楽の先生 あの旦那がよく分かっていないのは事実ですが、金払いはいいし——昨今、芸術は何よりもそれを求めています。「楽譜を見て軽く歌う」

ダンスの先生 ですが、わたしとしては、ちよつとした名誉を切に望みますね。わたしは称賛というものに心を打たれますし、素晴らしい芸術においては、馬鹿者どもに身をさらして、自分の作品を愚か者の野蛮な判断に委ねるのは拷問だと思えます。

音楽の先生 全く同感ですな。確かに、あんたの言う称賛ほど嬉しい気持ちになるものはありませんが、お世辞で生きていける人間はいません。「ジュールダン氏が出て来る部屋の方を身ぶりで示して」あいつがあんまり利口でないのは確かで、万事について途方もない馬鹿なことを言うし、ちつとも良くないものを褒める。でも、あいつの金が見当違いの埋め合わせをしているんです。芸術を理解できる人間しか金を払ってくれなかったら大変だ。この無知な商人は、我々をここに連れてきた見識ある貴族よりも価値があるんです。

ダンスの先生 あなたの言うことにも一理ありますが、ちよつとお金にこだわり過ぎだと思えますよ。お金のことを言うとか卑しさが残りますから、いやしくも自尊心のある人間はお金に対する興味を見せるべきじゃないと思います。

音楽の先生 「ハミングしながら振り返って」でも、あんただってあの金持ちがくれる金をほいほいと受け取っている。

ダンスの先生 もちろん。でも、それだけでわたしが幸せなわけじゃありませんし、あの旦那は金持ちなんだから、いい趣味を身に付けてもらいたい。

音楽の先生 いかにも。それを目指して我々は精一杯働いているんだ。だが、いずれにせよ、あの旦那は我々が有名になる手立てを与えてくれている。ほかの連中に代わって金を払ってくれて、その連中があの旦那に代わって褒めてくれる。

二人は笑う。ジュールダンの音が聞こえる。

ダンスの先生 旦那が来ますぞ。

ジュールダン氏がガウンとナイトキャップを身に着け、二人の従僕と一緒に入って来る。従僕の一人がジュールダン氏にハンカチを渡して服を見せ、もう一方が言う。「おはようございます」

ジュールダン やあ、諸君でしたか？ 何があるんですか？ 例のおかしな芸当を見せてくれるんですか？

ダンスの先生 「冷ややかに」何のおかしな芸当ですって？

ジュールダン はて、何と言ったかな。プロローグだったか、ダイアローグだったか、歌と踊りの。

ダンスの先生 ハハア！

音楽の先生 準備万端整っています。

ジュールダン ちょっとお待ちでしたが、実を言うと、今日は上流社会の着付けをしていただく。[振り向きながら]仕立屋が絹の靴下を送ってよこしたが、絶対に履くまいと思った。

音楽の先生 「皮肉っぽく」我々がここにいるのは、あなたの手がすくのを待たためなんですよ。

ジュールダン 願わくば「音楽の先生を押しつけながら」二人とも服が届くまで帰らないでほしい。「鏡を見ながら」服を着たわしを見てもらいたいんだ。

ダンスの先生 「わざとらしく」喜んで。
ジュールダン 「椅子のところに行こうと、ダンスの先生を押しつける」頭のとっぺんからつま先まで完璧な紳士に装ったわしが見られることだろう。

音楽の先生 そうに違いありません。

ジュールダン このガウンはあつらえたんだ、インド更紗だよ——ほら。「ガウンを見せる」ダンスの先生 実に素晴らしい。

二人とも触ってみる。

ジュールダン 仕立屋が言うには、爵位のある人間は朝こういう服を着るんだそうだ。

音楽の先生 最高に似合っています。

ジュールダン 従僕たちよ——

従僕たち はいっ！

ジュールダン おい、その——従僕二人。

従僕一 はい？

ジュールダン 何でもない。聞こえるかどうか確かめただけだ。「先生たちを振り向かせながら、二人に向かつて」このお仕着せをどう思うかね？

ダンスの先生 見事です。

ジュールダン 「ガウンを開いてレッド・ベルベッドのぴちぴちのズボンとグリーン・ベルベッドのジャケットを見せる」これは朝出歩く時に着るスーツなんだ。「つま先で立って回る」

音楽の先生 実にしゃれている。

ジュールダン 従僕ども！

従僕一 はい？

ジュールダン もう一人の従僕——

従僕二 はい？「進み出ながら」

ジュールダン 「ガウンを脱ぎながら」ガウンを持っててくれ。この格好、どうかな？ダンスの先生 大変結構で、これ以上はないでしょう。

ジュールダン では、あんた方のことに身を入れよう。「従僕二に腹を立てて肘掛け椅子に座り、苦勞して片脚を肘掛けに掛ける。位置が定まると——音楽の先生の話しを止める」

音楽の先生 まず曲を聴いていただきたい。「弟子を指差しながら」あなたにご注文いただいたセレナーデ用にこれが作りました。この手のことには素晴らしい才能のある弟子たちの一人です。

従僕がもう一枚ハンカチを渡す。

ジュールダン ああそう、でも、弟子なんかにはやらせるべきじゃなかった。あんたが自分でやっても少しも出来過ぎつてことはなかったんだから。「頭を振りながら」

音楽の先生 弟子という言葉を思い違いしないでください。こういう弟子たちは最高の師匠同様の知識を持っていて、曲はこれ以上ないくらい見事なものです。ちょっと聴いてみてください。

曲が演奏されると、ジュールダンは止めて従僕たちを呼ぶ。

ジュールダン 「従僕たちに」もっとよく聴こえるようにガウンをくれ。いや待て、ガウンなしの方がよさそうだ。「肘掛けにもう一方の脚をかける」すまん。「椅子の側に立ってまたガウンを脱ぎ、またもう一度着る」いや、ガウンを寄こせ、その方がよさそうだ。

音楽の先生 そうですね。

足用の椅子。(原文：Chair for feet)

女性歌手 「歌う」わたしは夜も昼も悩み、その苦しみは癒えません

その美しい目に重い鎖でつながれてからは――

ジュールダン いいね。

女性歌手 「歌う」でも、教えてください、イリスよ、あなたの敵にどんな恐ろしい運命が伴うのか

あなたの友をさえこんなふうに扱ふのなら？

ジュールダン 朝のこの時間、その歌はいささか陰気に思える。十分に人を寝かすことができる。とどこどころもうちよつと陽気にできたらいいんだが。「ブーツを磨く身振り」

音楽の先生 曲は歌詞と調和しなければなりません。

ジュールダン わしは歌詞に曲と調和してもらいたい。

音楽の先生 はい。

ジュールダン この前、実にかわいらしい歌を習ったんだが。歌って聴かせようか？「間」それじゃ、歌うぞ。ちよつと待て……えへん……どうだったかな？

従僕二が前に出て、立って歌う。

ダンスの先生 わたしは全く知りません。

ジュールダン そうだ、子羊が出てきたな。

ダンスの先生 子羊ですか？

先生たちは話しを続ける。ジュールダンが黙らせる。

ジュールダン でなきや、ハムだ。韻を踏むのは分かっているんだが……うん。そうだ！

「歌う」思ってた、わたしのかわいいナンビーは

最高に優しいと

思ってた、わたしのかわいいナンビーは

ランビー(子羊ちゃん)みたいにおとなしいと

あらまあ、あらまあ、あーらまあ

今、そのがみがみ女は何度となく言われてる

虎や熊ちゃんより獰猛だと

どうかな？「歯を舐める」かわいくないか？

音楽の先生 最高にかわいいです。

ダンスの先生 かわいいどころじゃありません――歌もお上手です。

ジュールダン 思いも寄らないだろうが、わたしは音楽なんか習ったことがないんだぞ。

音楽の先生 習うべきです。あなたはダンスを習っている。この二つの芸術は密接な関係があるんです。

ダンスの先生 それに、この二つの芸術は人の心を広くして素晴らしいものにします。
ジュールダン 爵位のある連中も音楽を習っているというのか？
音楽の先生 はい、さようで。

従僕が椅子をちよっと移動させる。

ジュールダン それなら、習うとしよう。「立ち上がりながら」だが、どうやって時間をみつけたものか分からない。今教わっているフェンシングの先生のほかに、哲学の先生を雇っていて、今朝から始める予定なんだ。

音楽の先生 哲学も大変結構ですが、音楽は、あなたは、音楽は……

ダンスの先生 音楽とダンスは……音楽とダンスあれば、必要なものはすべて手にしているということなんです。

音楽の先生 「ジュールダンの腕を取って、脇へ引き寄せながら」音楽ほど社交界で役に立つものではありません。

ダンスの先生 「もう一方の腕を取って、反対側に引き寄せながら」ダンスほど人間に必要なものではありません。

音楽の先生 「前と同じようににして」世の中に見られる混乱や戦争は、人々が音楽を習っていないから起きるんです。

ダンスの先生 「前と同じようににして」歴史書を埋めつくしている人間の災難のすべて、不幸な事故のすべて、政治家の間違い、偉大な將軍の敗北はすべて人々が踊り方を知らないから起きるんです。

ジュールダン それはどうしてだ？

音楽の先生 人々の間に協調性が欠けているから戦争が起きるんじゃないんですか？

ジュールダン そりゃそうだ。

音楽の先生 もしみんなが音楽を習っていれば、それが調子を合わる手立てに、世界平和をもたらず手立てになることでしよう……。

ジュールダン 全くそのとおりだ。「唐突に鏡のところへ行く」

ダンスの先生 家族の問題にしる、国家の政治にしる、軍隊の命令にしる、誰かが間違いを犯すと、決まって我々は言いませんか——誰それは足を踏みはずしたって？
ジュールダン うん、そうだな。「自分を鏡に映して見る」

ダンスの先生 それで、足を踏みはずしたら、その理由は踊り方を知らないということとしかないんです。

ジュールダン そのとおりだ——あなたたちは二人とも実に正しい。

ダンスの先生 今のは、ダンスと音楽がどんなに素晴らしくて有益なものか、お示ししたかっただけなんです。

ジュールダン 今はどう「あくびをする。従僕たちもあくびをする」実によく分かるよ。「苦勞して座る」

音楽の先生 我々の例の作品をご覧くださいますか？

ジュールダン ああ。

音楽の先生 すでにお話ししたように、これは、音楽で表現できるいろいろな感情を表現するために、以前、わたしが試しに作ったものにすぎません。
ジュールダン よかろう。

従僕一がチョコレートを持って来て、足元に椅子を置く。(原文：FIRST
FOOTMAN brings chocolate and puts chair at foot.)

音楽の先生 「歌手たちに」それじゃ、こつちへ。「ジュールダンに」この連中は羊飼いの格好をしていると思ってください。

ジュールダン 何でもいつも羊飼いなんだ？ どこもかしこも羊飼えばかりだ。

ダンスの先生 音楽で人に語らせるつもりなら、羊飼いをもっもらしく見せるためにはその人を羊飼いにしなければなりませんし、王子様や市議会議員が歌で情熱を表現することはまずなさそうですから。

ジュールダン どうして音楽家は羊を飼わないんだ？ まあいい、多分そのとおりなんだろう。さあ。「片足で指示する」

女性歌手 心は恋に圧倒されて服従し

幾度となく不安と恐怖がのしかかる

そのため息と悩みは甘いものだと人は言う

人はわたしのために言うでしょう

自由ほど甘いものはないと

男性歌手一 恋人の優しい情熱ほど甘いものはない

それが二つの燃えるような心に起こさせる

同じ人生、同じ欲望

愛のない色男が経験できる幸せはない

心を癒す愛を得る人生から

あらゆる喜びを取り去ってしまう

立ち上がると、いささかうんざりして、息をきらせながら歩き回る。

男性歌手二 ありがたいことに浮気女のアーチャーは去った

貞節なる者はすべて従う

過酷な運命でしか

本物の乙女は存在しない

不貞は憎しみによりふさわしく

愛は永遠に去るだろう

ジュールダン よくできている。多分。いいところがある。いくつか気がついた。

音楽の先生 オペラ全体を聴くまで待ってください。

ジュールダン オペラ全体だ——爵位のある連中はオペラの会を開くのか？

音楽の先生 もちろんです。

ジュールダン それなら開こう——盛り上がるのか？

音楽の先生 間違いなく。

作曲家 主役の男女や美しい背景、衣装など、オペラのことを考えてみてください。あなたもお喜びになることでしょう。

ジュールダン 衣装はどれだけあってもいい。どんな場面になるんだ？

作曲家 それは、荒れ果てたナクソス島を描きます。アリアドネがテーセウス王子に置き去りにされたところです。

ジュールダン 荒れ果てた島とは。そんな場面は誰も好まない。どうかほかの場所にしてくれ。そして、準備が間に合うように気を配ってくれ。わしがこんなことを準備しているのはあるご婦人のため、光栄にも今日わしと食事を共にして下さることになっているんだ。

作曲家 もう準備ができているのも同然です。

音楽の先生 もちろん、我々にはトリオがいます。

ジュールダン 何だ、それは？

音楽の先生 三重唱のための三人の歌い手です。

ジュールダン 四人とか五人じゃいけないのか？

音楽の先生 よござんすよ、リフレインを弾くバイオリン二挺と、低音を十分に出すためにヴィオラ・ダ・ガンバ（足で支えて奏するヴィオル、現代のチェロに相当）、リユート（ギターに似た弦楽器）、ハープシコード（鍵盤付き撥弦楽器、ピアノの前身）の伴奏が必要です。

ジュールダン トロンボーンも加えなきゃ。トロンボーンはわしの好きな楽器だ。実に調子がいい。その方があんたたちの稼ぎも多くなる。

音楽の先生 準備万端お任せください。

ジュールダン 万事、未亡人にふさわしくなるよう、気を配ってくれたよな？ 未亡人のこと、未亡人として生きることを決意した爵位のあるご婦人のことを考えなきゃいかん。だが、わしの言ってることが分かったとしても、そういうご婦人も長い間にはそれがそう簡単じゃないと気づくものだ。

作曲家 ナクソス島のアリアドネの話はお望みどおりのものです。アリアドネ妃は夫のテーセウス王子に置き去りにされて、それが続く限り悲嘆に暮れる未亡人です。そして、やっとバッカスがやって来て、彼女を慰めようと……

ジュールダン また羊飼いか？

作曲家 バッカスが？ バッカスは喜びの神ですよ。

ジュールダン ほう！

作曲家 バッカスは、髪にブドウの葉を着けてヒョウに乗る、青春真っ盛りの若者として描かれています。

ジュールダン そうか、なるほど。いいよ、羊飼いやないんなら。それと、荒れ果てた島を素晴らしく思えて居心地がいいものにしてくれ。特に照明には出費を惜しまないように。嫌だよ、わしがこうやっていろいろやっている目当てのご婦人が……「作曲家に」特にこの寸劇、何と言ったかな？

ダンスの先生 浮気者のツェルビネッタと四人の恋人です。

ジュールダン 四人だって？

ダンスの先生 はい。

ジュールダン えっ、何だと、その女は自分が未亡人だということをすっかり忘れてるん

だ。ああ、女よ、女よ、もしお前が世界を支配しているのなら、その四人の恋人を懲らしめる法律を制定するだろう。

ダンスの先生 多分。普通の女の浮気の場合はそうです。我々はすべて伯爵様の指示に従って準備しました。

ジュールダン とにかく、夕食の時に歌う連中を寄こすのを忘れないでくれ。

音楽の先生 すべてお望みどおりにします。

ジュールダン 特に、バレエは美しいのを。

音楽の先生 お気に召しますよ、特にメヌエット（三拍子の優雅な舞踏）は。

ジュールダン ああ、メヌエットはわしの得意なダンスだ。わしが踊るのを見てくれなきや。さあ、先生。

ダンスの先生 帽子をどうぞ。

ジュールダンは従僕の帽子を取って、ナイトキャップの上に被る。ダンスの先生がジュールダンの手を取り、自分が歌う曲に合わせて踊らせる。踊り始め、従僕二を回転させる。

ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！ ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！
ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！ ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！
調子を合わせて、ラ！ ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！ そんなに両肩を動かさないで。ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ！ 両腕が違います。ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。顔を上げて。「音楽を止めて言う」もう一度、黙って、見て！ つま先を外へ向けて、ラ、ラ、ラ！ 体を真っ直ぐに。

ジュールダンは目を回す。

ジュールダン どうなつとるんだ？

従僕たちは目をそむける。

音楽の先生 最高の出来です。

ジュールダン ところで「ダンスの先生を口笛で呼ぶ」伯爵夫人にするようなお辞儀の仕方を見せてくれ。もうすぐ必要になるんだ。

ダンスの先生 伯爵夫人にするようなお辞儀の仕方ですか？

ジュールダン そうだ、ドリメーヌという名前の伯爵夫人なんだ。

ダンスの先生 手をお貸しください。

ジュールダン いや、あんたがやってくれればいい。覚えておくから。

ダンスの先生 大いなる敬意を込めてやりたければ、一回お辞儀をして後ろに下がり、それからその方の前に進んで三回お辞儀をするんですが、三回目はその方の膝の高さまで身をかめなければいけません。

ジュールダン 口での説明も面白い。「頭をかきむしる」やってみてくれ。「ダンスの先生が三回お辞儀をした後」よろしい。「周り静かにさせる。ダンスの先生のまねをして帽子を放り投げると、従僕二がそれを受け止めて、ジュールダンがもう一度お辞儀をする時に投げ返す。従僕三（原文は従僕一）登場」

従僕三 フェンシングの先生がお越しになりました、旦那様。

ジュールダン 入ってレッスンをしてくれるよう言ってくれ。「背中をかきむしる。ほかの連中に」わしがレッスンを受けるのを見てもらいたい。

フェンシングの先生が入って来て咳をすると、ジュールダンは跳び上がり、ジャケットを脱ぐが、従僕一がそれを受け取り、従僕二が裏から数ふりのフルーレ（フェンシング用の剣の一つ）を持って来てジュールダンに一ふり渡す。フェンシングの先生が前に出て来る。やたらとどなりちらす権威主義の男で、声が大きくてぶつきらぼうである。音楽の先生は弟子たちを下がらせる。

フェンシングの先生 さあ、サルート（試合始めの礼）を。体を真っ直ぐにして。重心をちよつと左腿の方にかける。両脚はそんなに開かない。両足は一直線上に。手首は腰に当てる。剣先は肩の高さに。腕はそんなに伸ばさない。左手は目の高さに。左肩をちよつと内側に向ける。頭は真っ直ぐ。目はしっかり見据えて。前を向いて。体を安定させて。第四の構えと突きは同一線上で。一、二。引いて、突いて。一、二。後ろへ跳んで。

ジュールダンはダンスの先生のいる後ろへ跳んで頭をぬぐう。

受けの姿勢で。

ジュールダン あんたがやってくれ。

フェンシングの先生 あなたの突きでは、最初の動きであつと言う間に差し込まれますよ。

一——二。第三の構えと突きは同一線上で。前を向いて。体を固定して。剣先を相手の剣の反対側に回す。一、二。

従僕に苛立つジュールダン。ジュールダンが振り返ると、従僕は数ふりのフルーレを持ち出す。ジュールダンは従僕を呼んでハンカチで顔をぬぐい、フルーレを投げ落とす。

引いて、突いて、両足は固定して、後ろへ跳んで。受けの姿勢を、あなた、受けの姿勢ですよ。「フェンシングの先生は「受けの姿勢を」と言いながら、一、三回フェイントをかける」

ジュールダン どうだい？「音楽の先生に」

音楽の先生 何て素晴らしい。

フェンシングの先生 「ジュールダンを捕まえながら」お話ししたように、フェンシングのコツは二つだけ、突いて突かれぬことです。「後ずさりするジュールダンにやっつけて見せながら、離れる」先日お見せした理詰め之法則に従って、体のライン（剣士の体を上下左右の四つに分けた攻撃の目標部位）から敵の武器をそらす方法を知っていれば、体に触れられることはあり得ないのです。で、それは単に、内側へなり、外側へなり、手首のちよつとした動きにかかっているだけなんです。「椅子の後ろに回ってから、従僕の後ろに回る」

ジュールダン じゃ、勇気のない人間が確実にほかの奴を殺せて、自分は殺されっこないのはどうしてなんだ？

フェンシングの先生 ごもつとも。

ジュールダン それじゃ不公平じゃないのか？

フェンシングの先生 証明してみせたじゃありませんか。

ジュールダン そうだが。「訳が分からず叫びながら従僕を叩く」

フェンシングの先生 それゆえ、我々が国にとってどんなに重要であるかが分かって——ジュールダン そうだ。「従僕を叩く」

フェンシングの先生 さらに、比べてみれば、軍事的な学問がどんなに優れているか、こういう役立たずのダンスや、音楽や……

ダンスの先生 「前に出て来ながら」お若いのが、ダンスについて語る時は敬意を表していただきたいものですな。

音楽の先生 「ダンスの先生を引き戻しながら」それに、どうかそんなものよりも音楽の素晴らしさを優遇することを学んでいただかなくては。

フェンシングの先生 あんた方の学問をわたしの学問と比べるなんて、あんた方もおかしな人たちだ。

音楽の先生 この人は自分のことを何だと思っているのだろう。

ダンスの先生 全くふざけてる。

フェンシングの先生 すぐ踊らせてあげますよ、お若いのが。バイオリン弾きさんよ。結構な歌を歌わせてやりますよ。

ダンスの先生 この自惚れ屋が、余計なお世話だ。

ジュールダン 「ダンスの先生に」馬鹿なこと言いなさんな。第三の構えと第四の構えを完全にマスターしていて、理詰め之法則で人を殺せる人間と喧嘩するなんて。

ダンスの先生 わたしにはこの人の理詰め之法則やら第三の構えと第四の構えなんぞちつとも問題じゃありません。

ジュールダン 「ダンスの先生に」落ち着けてば。

フェンシングの先生 「ダンスの先生に」何言ってやがる、失敬な奴だ。

ジュールダン まあまあ、先生。

ダンスの先生 「フェンシングの先生に」何言ってやがる、この老いぼれが。

ジュールダン まあまあ、先生。

ダンスの先生 いったんわたしが取りかかったら……

ジュールダン 「フェンシングの先生に」落ち着いて。

ダンスの先生 わたしがあんたを捕まえたら……

ジュールダン 「フェンシングの先生に」冷静に。

フェンシングの先生 わたしならぶん殴ってやるところだ……

ジュールダン 「フェンシングの先生に」頼むから……「二人の間に割って入る」

ダンスの先生 あんたを打ちのめして……

ジュールダン 「ダンスの先生に」お願いだから。

音楽の先生 我々がこいつに口の利き方を教えてやりませよ。

ジュールダン 「音楽の先生に」頼むから、やめてくれ。

勿体ぶって大言壮語する哲学者登場。

やあ！ 哲学の先生だ。ちょうどいい時にいまいました哲学を持って来てくれた。こっちへ来て、この人たちの仲裁をしてくださいよ。

哲学者 どうしたんですか？ 何なんです、諸君？

ジュールダン この人たちは自分たちの職業のどっちが重要かということで怒っています。お互いに悪口を言って殴り合いになりそうなんです。

哲学者 まあまあ、諸君、そんなふうに分を見失っちゃいけません。セネカ（古代ローマの政治家・哲学者）が怒りについて書いたあの権威ある論文を読んだことがないんですか？ 人間を野獣にしてしまう怒りほど恥ずべきものがあるのでしょうか？ すべての行動の支配者が理性でなければならぬことははっきりしています。

ダンスの先生 どういうことですか、先生？ あいつは我々二人を侮辱していたんですよ。

わたしが教えているダンスとこの人の職業である音楽を見下すんです。

哲学者 賢明な人間は受けるかもしれない侮辱を超越しています。悪口に対する反応として、寛容と忍耐以上のものではありません。

フェンシングの先生 この二人は厚かましくも自分たちの職業をわたしの職業と比べたんですぞ。

哲学者 それはどうしたというんですか？ 人間がお互いに満足すべきなのは、空しい栄光や地位のためじゃありません。一人の人間を他の人間と区別するものは、知恵と美德なんです。

ジュールダン は椅子を下手（客席に向かって右側）前方に持って行き、哲学者たちを見る。

ジュールダン よくぞ言ってくれた、その都度美德を發揮してくれたまえ。

ダンスの先生 ダンスはいかに敬意を表しても表し尽くせない学問だと、わたしは言うてるんです。

音楽の先生 そして、わたしは、音楽はあらゆる時代が敬意を払ってきた学問だと言うてるんです。

フェンシングの先生 「ジュールダンに」そこで、わたしがこの二人に言ってるのは、攻撃の学問はあらゆる学問の中で最も立派でかつ必要な学問だと言ってるんです。哲学者 それじゃ、哲学はどうなんだ？ あんたたちは三人とも失礼だ、傲慢にもわた

しの前でわざわざそんなことを言うなんて。あんたたちは厚かましくも、芸術と呼ぶことすら値しないことを学問と呼んでいる。そう、この連中は、賞金稼ぎのボクサーとかストリートシンガーや大道芸人のような哀れな商売と同列にしか呼ぶことはできない。

フェンシングの先生 このへば哲学者が。

音楽の先生 このえせ学者が。

ダンスの先生 このくそ教師が。

哲学者 何だと！ この汚らわしいごろつきどもが！「哲学者が三人に体当たりし、三人は揃って哲学者を殴る」

ジュールダン ああ、哲学者の先生よ。「立ち上がる」

哲学者 ごろつきどもめ！

ジュールダン ああ、哲学よ。

格闘の間、ジュールダンは割って入るが、外に出る。従僕二人は不動の姿勢。

フェンシングの先生 人でなし！

ジュールダン 皆さん！

哲学者 生意気な。

ジュールダン まあまあ、先生。

ダンスの先生 とんま！

ジュールダン 皆さん！

哲学者 このごろつきが！

ジュールダン 皆さん！ 皆さん！

音楽の先生 あつかましい奴め！

哲学者 ごろつき、悪党、ペテン師め！

ジュールダン 皆さん、皆さん！ ああ、皆さん——皆さん！

四人は争いながら出て行く。ジュールダンは従僕を呼び、椅子を戻した従僕に助けられて座る。

ジュールダン ああ、それじゃ、お望みなら外でやってくれ。わたしにはどうすることもできない。ガウンを台なしにしてまであんたたちを引き離すつもりはない。わたしはこの連中の中に入って行くほど馬鹿じゃない。怪我するかもしれないからな。
「座る」

従僕は上手（客席に向かって左）から足用の椅子を持って来る。（原文…
FOOTMAN brings chair from left for feet.）哲学者が襟飾りを直しなが
ら戻って来る。

哲学者 さあ、レッスンを始めましょう。

ジュールダン ああ、先生、殴られたりしてお気の毒に。

哲学者 何でもありません。哲学者はこういうことの受け止め方を分かっています。あの連中のことをユウエナリス（ローマ帝国の政治・社会を諷刺した詩人）風の風刺詩に書いて、その詩で連中を木端微塵にします。それはよしとしましょう。何を学びたいですか？

ジュールダン 何もかも、わしは何としても学者になりたいんだ、腹立たしいことに、若い時分に親父とお袋がいろんな学問を学ばせてくれなかったんだ。

哲学者 そう思うのはごもつともです。「ナム・シネ・ドクトリナ・ヴィタ・エスト・クワジ・モルティス・イマゴ」。

ジュールダンは片足を降ろす。哲学者は座る。

ジュールダン あなたはお分かりだ。もちろん、ラテン語はご存じで？

哲学者 それは、「学ばなければ、人生は死と同じようなものだ」という意味です。

ジュールダン 心得たものだ。「歯を舐める」

哲学者 何か学問の原理原則か基礎が身につけてますか？

ジュールダン もちろん。読み書きができる。

哲学者 何から始めましょうか？ 論理学をお教えしましょうか？

ジュールダン 論理学って何だ？

哲学者 精神の三つの働きを教えるものです。

ジュールダン 何なんだそれは、精神の三つの働きのってのは？

哲学者 第一「指で数える」、第二と第三です。

ジュールダン ああ！「指で数える」

哲学者 第一は、一般概念によって適切に理解することです。

ジュールダン ほう。

哲学者 第二は、分類（ぶんるい）することによって適切に判断することです。

ジュールダン ぶん？

哲学者 るいするです。そして、第三は、「バルバラ・ケラレント・ダリイ・フェリオ・バラリブトン云々」（アリストテレス論理学の妥当な推論形式を暗唱するために考案された詞の冒頭）、三段論法によって正しく結論を導くことです。

ジュールダン 何て難しい大げさな言葉だ。あんたの言うその論理学とやらは好かん。もっと上流階級にふさわしいのを教えてくれたまえ。

哲学者 倫理学はいかがですか？

ジュールダン 倫理学？

哲学者　そうです。

ジュールダン　「従僕を見る」倫理学は何を扱うんだ？

哲学者　幸福を扱って、感情を抑制することを教え……

ジュールダン　いや、そんなんじゃないな。わしは超短気だから、良かろうが悪かろうが、いつ何時だったってかっとなったら怒りたいんだ。

哲学者　物理学はいかがですか？

ジュールダン　「また従僕を見る」物理学は何を扱うんだ？　さっさと行ってくれ。

哲学者　物理学は、自然界の事象の原理と物体の特性を明らかにして、元素、金属、鉱物、石、植物、動物の性質を論じます。

ジュールダン　待て。待ってくれ……「一杯飲む」

哲学者　……そして、流れ星、虹、鬼火（夜、墓地や湿地で燃える青色の火）、彗星、稲妻、雷、雨、雪、雹（ひょう）——風や竜巻の原因を教えます。

ジュールダン　それじゃ大騒ぎだ——ごちゃごちゃだ。

哲学者　それじゃ、何をお教えすればいいですか？

ジュールダン　教えてもらいたいのは……「間」綴り方だ。

哲学者　分かりました。「立ち上がる」

ジュールダンは両足を哲学者の椅子に載せる。

ジュールダン　その後、いつ月が出るのか、いつ出ないのか分かるように、暦を教えてください。

哲学者　そうなるといいが。「前後に行ったり来たりする。従僕が咳払いをし、ジュールダンが止める」いいですか、文字を分類すると母音というのがあります。母音は、A（ア）、E（エ）、I（イ）、O（オ）、U（ウ）の五つです。

ジュールダン　そのとおりだが。「従僕の方を向く」そのとおりだ。

哲学者　母音のAは口を大きく開いて、ア。

ジュールダン　ア。ア。「椅子から落ちる」はい。

哲学者　母音のエは「座ろうとすると、ジュールダンがまた両脚を上げる」上顎と下顎を近づけて口の両端を耳の方に引っ張って、エ。

ジュールダン　エ。エ。「哲学者は座る」なるほど。ああ、何て素晴らしい。

哲学者　そして、母音のイはできるだけ口を大きく開いて。

ジュールダン　イ。イ。イ。イ。「苦労した後で」できた。学問万歳三回だ。

従僕たちが喝采する。ジュールダンは止める。

哲学者　母音のオは上顎と下顎を開いて、上唇と下唇を近づけて——オ。

ジュールダン　オ。オ。全くそのとおりだ。

二人　ア。エ。イ。オ。イ。オ。

ジュールダン　素晴らしい。イ。オ。オ。イ。オ。

従僕たち　オ。

ジュールダン ああ、何かを知ってるのは何て素晴らしいことだ。

哲学者 母音のウは歯を完全にはくっつかない程度に近づけて、両唇を突く出して、ウ。

ジュールダン ウ。ウ。全くそのとおりだ、ウ。

哲学者 しかめっ面をするように両唇を突き出します。誰かに対して軽蔑の気持ちを示すために顔をしかめたくなくなったら、ウと言うだけでいいんです。

ジュールダン ウ。ウ。本当だ。ああ、こういうことを知るために、どうしてもっと早く

学ばなかったんだろう。「きつくて痛い片方の靴を脱ぐ」

哲学者 明日はほかの文字に注目しましょう。子音です。

ジュールダン それにもこんな興味深いところがあるんですか？

哲学者 間違いなく。例えば、子音のD（ディー）は舌の先を上歯に当てて発音します——だ。

ジュールダン ダ——だ！「従僕が加わる。ジュールダンはしかる」ああ、素晴らしい。

素晴らしいことだ。

哲学者 F（エフ）は上の歯を下唇に当てて、ファ、ファ。

ジュールダン ファ。ファ。本当だ。ああ、ファ！父と母よ、何と素晴らしいことか。

哲学者 そして、R（アール）は舌先を口蓋の上に持って行き、勢いよく空気がかすつて通ることで舌先が押されても必ず同じところに戻るように——一種の振動を起すすみたいにして。ル。ラ。

ジュールダンは顔を拭う。

ジュールダン ル。ル。ル。ラ。「二人で一緒に言い、ジュールダンはちよつとばかり飽きてくる」本当だ。ああ、あなたは頭がいい。わしはどれだけ時間を無

駄にしてきたことか。ル。ル。ラ。

哲学者 「ジュールダンの背中を叩く」こういう興味深いことを全部、わたしがきつかり説明しますよ。

ジュールダン そうしてくれたまえ、またいつかな。でも、今は秘密を打ち明けたいんだ。

わしは爵位のある女性に恋していて、その女性宛てに小さなメモを書くのを手伝ってもらえるとありがたい。それをその女性の足元に落としたいんだ。「めくばせし、二人は椅子を寄せて座る。ジュールダンは従僕たちを下がらせる」

哲学者 いいですよ。

ジュールダン 気の利いたやつですよね？

哲学者 もちろんです。韻文で書きたいんですか？

ジュールダン いやいや——韻文はやめて。

哲学者 散文でなきゃダメですか？

ジュールダン いいや。「帽子を脱いで投げ飛ばす」散文も韻文もダメです。

哲学者 どちらかにしてもらわないと。

ジュールダン 何で？

哲学者 それは、散文か韻文以外に自分を表現する方法がないからです。

ジュールダン 散文か韻文以外にないの？

哲学者 ええ。散文でないものはすべて韻文であって、韻文でないものはすべて散文なんです。

ジュールダン それじゃ、人間が話すのは——あれは何なんだ？

哲学者 散文です。

ジュールダン 何と——わしが「ニコル、スリッパを持って来てくれ、ナイトキャップをくれ」って言うのと、それは散文なのか？

哲学者 そうです。

ジュールダン 何てこった、わしはそんなこと知らずに四十年以上散文を話してきたんだ。ハハ！ 教えてくれて大いに感謝するよ。とにかく、わしがメモに書きたいのは、「美しいご婦人よ、あなたの目が美しいから、わたしはあなたに恋焦がれて死にしそうです」なんだが、望んでいるのは「身振りをして」それをうまく変えて上品に書くことなんだ。

哲学者 あなたが書きたいのは、そのご婦人の燃えるような目があなたの心を灰にすることと、あなたはそのご婦人のために夜も昼も苦しんでいて、その苦痛は……ジュールダン いやいや、そんなことは望んでない。わしが望んでいるのは、わしと言ったことを爵位のある人間の言い方で書くだけのことなんだ。「膝を叩く」「美しいご婦人よ、あなたの目が美しいから、わたしはあなたに恋焦がれて死にしようです」「哲学者の膝を叩く」

哲学者 もう少し付け足さなきゃいけません。

ジュールダン 嫌だと言ってるんだ。どうか、わしに分かるように、いくつか違う言い方を教えてくれたまえ。

哲学者 では、まず、あなたが言ったように「美しいご婦人よ、あなたの目が美しいから、わたしはあなたに恋焦がれて死にそうです」と書くことができます。「両脚をテーブルの上上げる」さもなければ、「あなたに恋焦がれて死にそうです、美しいご婦人よ、あなたの目が美しいから」——さもなきゃ、「あなたの目が美しいから、わたしはあなたに恋焦がれて、美しいご婦人よ、死にそうです」、あるいは、「あなたの目が美しいから、あなたに恋焦がれて死にそうです、美しいご婦人よ、わたしは」——または、「あなたの目が美しいから、わたしは死にそうです、美しいご婦人よ、あなたに恋焦がれて」、でなきゃ……

二人は椅子を向い合わせる。

ジュールダン だけど、たくさんある中でどれが一番いいんだ？

哲学者 あなたが言った「美しいご婦人よ、あなたの目が美しいから、わたしはあなたに恋焦がれて死にそうです」だと思います。

ジュールダン 「立ち上がる」わしは学んだことがないのに、最初の一言で言ったんだ——心から礼を言うよ——「哲学者が立ち上がるのを手伝い、半ば押しやる」明日の朝早く来てもらいたい。

哲学者 必ず。「退場」

ジュールダン 「前に出て来ながら」この哲学はわしの命取りになるな。「従僕に」おい「教
わったことを繰り返し言い始める」……わしの服はまだ来ないのか？

従僕二 はい、旦那様。

ジュールダン やらなきゃならんことがたくさんある日に待たせるとは、あのいまいまし
い仕立屋もひど過ぎる。腹が立つ。人でなしの仕立屋に何か起きりやいいんだ。「椅子を
「歩き回りながら」鬼にでも食われる。喉でも詰まらせりやいいんだ。「椅子を
壊しかけるがやめる」あいつを捕まえさせたら、あのうすぎたない仕立屋め、
あのろくでなしの仕立屋め、あの嘘つきの仕立屋め、わしが……

仕立屋が助手と一緒に服を一着持って入って来る。

おお、来たか。腹を立ててたところだ。

仕立屋 これ以上早く来ることができませんでした。あなた様の服に二十人で取りかか
らせてまして。

ジュールダン あんたが送って寄こした絹の靴下はきつかったから、履くのにえらい苦労
して、もう縫い目がほころびてしまった。

仕立屋 伸びすぎるだけでしょう。「ひざまずいて触ってみる」

ジュールダン あんたが作った靴はひどくきつくて痛いぞ。

仕立屋 決してそんなことは。「足をつまむ」

ジュールダン やめてくれ——どういうつもりだ——決してそんなことは、だと？

仕立屋 はい、きつありません。

ジュールダン きつくない——きつくないっていうのか。

仕立屋 好みの問題にすぎません。

ジュールダン わしがそう感じるんだから、それがわしの好みなんだ——わしらは何を話
してるんだ——ファ、ファ、ファ、ダ、ダ、ダ。

仕立屋 「ジュールダンが気が狂いそうだと思う」ご覧ください、宮廷で最も立派でき
ちんとした服です。

ジュールダン ラ。

仕立屋 本格的な服を黒以外の生地でデザインしたというのは傑作というものです。手
前どもは最先端の仕立屋に圧倒的な差をつけましたから、連中もやろうとはし
ないでしょう。「服を渡す」

ジュールダン 何だこれは？ 花が逆さまになっている。

仕立屋 逆の上向きにはおっしゃいませんでしたが。

ジュールダン そう言わなきゃいけなかったのか？

仕立屋 はい。

ジュールダン あっそう、それなら結構。でも、花が上向きに育たないんじゃ……

仕立屋 お望みなら、逆の上向きにおつけしますが。

ジュールダン いや。結構。ウ。ウ。

仕立屋 そうおっしゃってくださいさっさとすれば。

ジュールダン いや、結構と言ってるんだ。ウ。ウ。あんたはちゃんとやった。ウ。ウ。ちゃんとな。この服はわしに似合うのか？

仕立屋 よくぞ聞いてくださいました！ 絵筆で描くにしても、これ以上ぴったりの服を描ける画家なんかいるはずがありません。手前どもには、ズボンの裁断にかけては世界一の天才がおりますし――

ジュールダン ダ。

仕立屋 ほかにも、現代のダブレット（腰のくびれた胴衣）作りの英雄がおります。

ジュールダン それに、このかつらと羽根飾りだが「身振りで示す」、これでいいのか？

仕立屋 申し分ありません。「自慢げに」お召しになってみますか？

ジュールダン ああ、寄こしてくれ。「従僕を呼ぶ」

仕立屋 ちよっとお待ちを。そんなふうにしてはいけません。音楽に合わせてお着せするよう助手を連れてまいりました。こういう服は仰々しくお召しにならないければ。

ジュールダン では、その連中を入れてくれ。

仕立屋 おいみんな、急いで入ってくるんだ。「四人の助手が登場し、彼らに向かって」上流社会の方にするように、この紳士にこの服をお着せするんだ。

四人の助手は踊りながらジュールダンに近づく。一人がズボンを脱がせ、あとの二人はベストを脱がせる――それから、引き続き踊りながら、ジュールダンに新しい服を着せる。ジュールダン氏は彼らの間を歩き回って、ぴったりかどうか確認させるために服を見せる。

ジュールダン ついて来い、ちよっとばかり街の連中にこの服を見せびらかすんだ。あんたたちがわしの家来だと分かるように、わしのすぐ後ろについて歩くようしつかり気をつけてくれよな。「二回りして退場」

幕

第二幕

場面…同じ。

ジュールダン氏と二人の従僕が通りから入って来る。従僕たちはうんざりしている。

ジュールダン ニコルを呼んでくれ。言いつけておきたいことがあるんだ。いや、そのままでいい、来たから。

二人の従僕は下手に行く。ジュールダン氏の小間使いニコルが入って来る。

ニコル！

ニコル はい、旦那様？

ジュールダン 聞くんのだ！

ニコル 「笑いながら」ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン 何を笑ってるんだ？

ニコル ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン 「怒って」このあばずれは何を言ってるんだ？

ニコル ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！ コスプレしてらっしゃる！ ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン お前は何を言ってるんだ？

ニコル ああ、びっくりした！ ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン このあばずれめ、わしをからかっているのか？

ニコル あら、いえ、旦那様。そんなことしたって何にもなりません。ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン それ以上笑ったら、顔を叩くぞ。

ニコル どうしようもなくて、旦那様。ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン 「脅すように」やめるよな？

ニコル お許しください、旦那様。本当にやめます。でも、あんまりこっけいで。笑わずにはいられません。ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン 生意気な！

時々、従僕がニコルを黙らせようとする。

ニコル そんな恰好でおかしくて！ ヒ、ヒ！

ジュールダン この――

ニコル ああ、どうかお許しください！ ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン さあいいか、あとちよつとも笑ったら、今まで食らったことのないくらい強いのを横っ面におみまいするからな。

ニコル はい、かしこまりました、旦那様、もうおしまいにします。これ以上笑いませ
ん。

ジュールダン くれぐれも気をつけるよ！「気持ちを切り替えて」お前がやらなきゃなら
ないのは、この部屋を――

ニコル ヒ、ヒ！

ジュールダン この部屋をきれいに掃除――

ニコル ヒ、ヒ！

ジュールダン 「気持ちを抑えようとしながら」言ってるんだ、お前がやらなきゃなら
ないのは、午後までにこの部屋をきれいに掃除して……

ニコル ヒ、ヒ！

ジュールダン またか？

ニコル 「床に倒れるほど笑いながら」ああ、旦那様、いっそのこと、わたしを叩いて、
思う存分笑わせてください！ その方がずっとましです。ヒ、ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン 気が変になりそうさ。何を笑ってるんだ！

ニコル ああ、旦那さま、ぜひわたしを叩いてください。どうか笑わせてください。ヒ、
ヒ、ヒ、ヒ！

ジュールダン わしがお前に手を上げたら――

ニコル 旦那様、わたし、笑わないと爆発しそうなんです。

ジュールダン 「怒り狂って」こんなあばずれ、見たことがない。

ニコル わたしにどうしろと？

ジュールダン このあばずれが！ もうじき来る客のために部屋の準備をしろと言ってる
んだ。

ニコル 「立ち上がりながら」お客ですって！ まあ、あきれた！ もう、笑ってる場
合じゃないわ。旦那様のお客ときたら、さんざん散らかすから、その言葉を聞
くだけでも腹が立つ。

ジュールダン ダ……お前はわたしに誰も家に入れるなというのか？

ニコル とにかく、家に入れない方がいい方もいらっしやいます。

ジュールダン は座ろうとするが座れない。ジュールダン夫人登場。中年
のむっつりした女性。一般的な事柄について自分の意見を持ち、それを
自由に述べる。

ジュールダン夫人 アハハ！ また馬鹿げたことを！ それにしても、お父さん、どうし
てそんな恰好をしてるんですか？ そんな恰好をして、正気を失ってしまった
んですか？ みんなに笑ってもらいたいんですか？

ジュールダン これからわしを笑うのは、母さん、男も女も馬鹿なやつだけだ。

ジュールダン夫人 これからですって！ まあ、今始まったことじゃないのよ。みんな、
ずっと前からあなたの馬鹿げた行動を笑っているわ。

ジュールダン みんなって誰だ、教えてくれ。

ジュールダン夫人 善良であなたより分別のある人たちよ。あなたの暮らし方にはうんざりだわ、まったく。みんな、一年中クリスマスだったと思うでしょうし、大騒音にご近所もみんな迷惑してるわ。

ニコル 奥様がおっしゃってることは本当に本当です。旦那様が呼ぶ連中ときたら、家をきれいにすることなんかできやしません。あの連中の足は、町中の泥を探しまくって持ち込むんですから。

ジュールダン これら、お前はうちが田舎で見つけた娘にしては随分口が悪いぞ。

ジュールダン夫人 ニコルは全く正しいし、あなたより分別があるわ。あなたが年甲斐もなくダンスの先生と何をするつもりなのか知りたいものだわ！

ニコル それに、家全体を揺り落とすほどに足を踏み鳴らしながらやって来る図体の大きな無骨者のフェンシングの先生のことも。

ジュールダン 黙れと言ってるんだ！ 無知な女どもめ、お前たちにはそういうことの有利な点が分かるのだ。

ジュールダン夫人 あなたは年頃の娘を結婚させることを考えた方がいいわ。

ジュールダン ふさわしい相手が現れたら考えよう。でも、わたしは上品なことを学ぶことも考えたいんだ。

ニコル もうたくさんでしょうが、奥様、わたしは旦那様が今日哲学の先生をお迎えしたと聞いてます。

ジュールダン 確かに。わたしは賢くなりたい。上品な人たちと話ができるようになりたいんだ。

ジュールダン夫人 近い内に学校に通って鞭で打たれたらどうなの？ その年で！

ジュールダン いいじゃないか。学校で教えることを学ぶことさえできれば、今この瞬間、全世界の前で鞭打たれても神に感謝するよ。

ニコル あらまあ、そうすれば、大層旦那様の役に立つことでしょうね！

ジュールダン 間違いない。お前たちの話は馬鹿みたいだ、揃いも揃って、わたしはお前たちの無知が恥ずかしい。「ジュールダン夫人に」例えば、お前は今自分が言っていることが分かっているのか？ 「もがきながら座る」

ジュールダン夫人 もちろん。わたしは自分の言っていることが正しいことと、あなたが違った生き方を考えなきゃいけないことは分かっています。

ジュールダン そんなことを言ってるんじゃない。いいか。わたしが聞いているのは、わたしがお前と話しているのは何なのか、わたしが今言っているのは何なのかだ。

ジュールダン夫人 馬鹿げたくだらない話だわ。

ジュールダン いや、違う、そうじゃない！ 散文だ——この無知な女め！

ジュールダン夫人 散文？

ジュールダン そう、散文だ。散文であるものはすべて散文ではない。そして、韻文でないものはすべて韻文である。どうだ？ これが学ぶことの成果だ。「ニコルに」そしてお前、ウと言うにはどうしなければいけないか知ってるか？

ニコル 何ですって？

ジュールダン ためしにウと言ってみる。「身振りでジュールダン夫人を座らせる」

ニコル 分かりました、それじゃ——ウ。

ジュールダン そう、だが、お前はウと言う時、どうする？

ニコル 旦那様がおっしゃるとおりにします。

ジュールダン 無知な女を扱わなきゃならんというのは何たることだ！ 両唇を突き出して、上顎を下顎の方に引き寄せるんだ。ウー——分かるか？ 顔をしかめるんだ——ウ。

ニコル はい、なるほど。

ジュールダン夫人 「皮肉っぽく」素晴らしいわ！

ジュールダン オ、そしてダ、ダ、そしてファ、ファと言うとなると、また違ってくる。

ジュールダン夫人 一体何なんですか、その馬鹿馬鹿しいのは？

ニコル とにかく、何の役に立つんですか？

ジュールダン 「苛立って」無知な女どもを見ると気が狂いそうになる！

ジュールダン夫人 馬鹿言わないで！ こういう人たちはみんな、馬鹿げた話と一括りにして放り投げてしまわなきゃ！

ニコル 特に、あちこちで足を踏み鳴らしながらやって来て、この家をほこりだらけにする、あの図体の大きな無骨者のフェンシングの先生は。

ジュールダン ほお、あのフェンシングの先生が気に入らないみたいだな。お前は自分で言っていることが分かっていないってことを教えてやろう。「立ち上がって、従僕を呼ぶ。フルーレの束を持って来させ、その内の一ふりをニコルに渡す」いいか、理詰めの方則、体のラインだ。第四の構えで突く時は、こうするだけでいい。第三の構えで突く時は、こうするだけでいい。こうすれば、絶対に殺されることはない。誰かと戦っても全く安全だというのは、素晴らしいことじゃないか？ さあ、試しにわしをちよつと突いて見る。

ニコル さあ、どうですか？「ジュールダンを何回か突く」

ジュールダン 「回りながら」気をつける！ ちよつと待て！ くら、もつとゆつくり！ このあばずれめ。

ニコル 突けと言ったじゃないですか。

ジュールダン ああ、だが、お前は第四の構えで突く前に第三の構えで突いて、わしがかわすのを待たないからだ。従僕！「フルーレを渡す」

ジュールダン夫人 あなたはどうかしてるわ、お父さん、気まぐればかり起こして。こうなったのも、お歴々と関わり合いになってからだわ。「非難し始める」

ジュールダン 「苛立って」お歴々と関わり合う時、わしは見識を見せているんだ。中流階級と関わり合うよりずっとましだ。わしが嫌いなのは——

ジュールダン夫人 「皮肉っぽく」ああそう、そうでしょうね！ 名士と付き合うことで得るものはたくさんあるわ。あなたは、自分が夢中になっているあのつまらない貴族から甘い汁を吸ってきたもの。

ジュールダン 黙れ、母さん！ あの方はお前が思っているよりもずっと重要な人物なんだ。宮廷で高く買われている貴族だ。そして、わしがお前と話すのと全く同じように、王様と話すことができる——「おはよう」なんて言って。そういう地位の人間が度々ここに来るのを世間が見たら、わしにとって大いに役立つことにな

らないか？ それに、わしのことを親友と呼んで、まるで同等な人間であるかのように扱ってください。

ジュールダン夫人 ああ、そう、あの人はあなたにとっても親切だけど、あなたからお金を借りてる。

ジュールダン でも、そういう地位の人間に金を貸すというのは光栄なことじゃないのか？ わしは自分のことを親友と呼んでくれる紳士をおろそかにはできない。

ジュールダン夫人 それで、その紳士はあなたのために何をしてくれるの？

ジュールダン お前が知ったら驚くようなことだ。

ジュールダン夫人 それは何なの？

ジュールダン もういいだろ——説明する訳にはいかんだ。わしがあの方に金を貸した上に、その内に返してもくださるというだけで十分だ。

ジュールダン夫人 馬鹿馬鹿しい。

ジュールダン あの方は約束を守るよ——確かだ。

ジュールダン夫人 きつと返さないと思う。それに、あなたをちやほやするのは、一杯食わせるためではないわ。

ジュールダン 口を慎め！「呼び鈴が鳴る」お越しになった。淑女らしくしろ。

ジュールダン夫人 もうたくさん！ あの人は何がしか借りに来るんだわ。あの人の姿を見るだけで食欲がなくなる。

ジュールダン 口を慎めと言ってるだろ！「ジュールダン夫人を立ち上がらせる」さあ、お辞儀を。

ドラントが入って来る。実に優雅で、実にわざとらしく腰が低く、実に貴族的。

ドラント わが親友、ジュールダン殿、ご機嫌いかがかな？

ジュールダン とても元気です、何なりとお申しつけください。

ドラント そして、ジュールダン夫人、いかがですか？

ジュールダン夫人 お会いしても、何の得にもなりません！

ジュールダン 「笑ってごまかす」母なるウイットだ！

ドラント おや、ジュールダン殿、あなたは粋な方だ。

ジュールダン お目にとまりましたか！

ドラント 流行の服をお召しのようにすな。宮廷であなたほど素敵で恰好をしている青年はおりません。

ジュールダン それはそれは！

ジュールダン夫人 「傍白」この人は夫に取り入る術を心得ているわ。

ドラント 向こうを向いてみてごらんさい。実にスマートです。

ジュールダン夫人 「傍白」そう、大馬鹿なのは前も後ろも同じよ。「座る」

ジュールダン 妻をお許しください。「妻を指差しながら」

ドラント 本当のところ、ジュールダン殿、わたしは妙にあなたに会いたくてしかたがなかつたんです。世界中であなたほどわたしが尊敬する方はおりませんで、謁見の儀でもあなたのことを話していたくらいです。

ジュールダン それは光栄です。「ジュールダン夫人に」謁見の儀だと！「ウインクする」ドラント 帽子を被ってみてください。

ジュールダン あなたに払うべき敬意は心得ているつもりですから。ドラント これはしたり！帽子をお被りください。我々の間で礼儀作法はご無用に願います。

ジュールダン それはどうも、ドラント様！

ドラント いいですから、帽子をお被りください、ジュールダン殿。あなたはわたしの友人でなんですから。

ジュールダン わたしはあなたのふつつかなしもべです。

ドラント あなたが帽子を被らないのなら、わたしも被りますまい。

ジュールダン 「帽子を被りながら」嫌われるよりは不作法の方がましです。

ドラント ご承知のように、わたしはあなたに借りがありません。「席に着いて馬みたいに座る」

ジュールダン夫人 「傍白」そう、そんなことは百も承知よ。

ドラント あなたは気前よく何回もお金を貸してください、間違いなく最高の快さをもって恩恵を施してくださいました。

ジュールダン 「席に着いて同じように座る」いえ、あなた、そんなことは何でもありません。

ドラント わたしは借金をお返ししたくて、勘定をはっきりさせるために来ました。

ジュールダン 「ジュールダン夫人に傍白」ほら、お前がいかに間違ってたか分かったら、

母さん。

ドラント わたしは、借金はできるだけ早く返したい人間です。

ジュールダン 「ジュールダン夫人に傍白」わしが言ったとおりだ！

ドラント わたしがお借りしているものを確認しましょう。お貸しくださったお金を正確に覚えておいでですか？

ジュールダン そのつもりです。メモを取ってありますから——これです。最初に二〇〇

ドラント 確かに！

ジュールダン 二回目に一二〇。

ドラント そうです。

ジュールダン その次に一四〇——

ジュールダン夫人 ええっ？

ジュールダン しっ！

ドラント 正にそのとおりです。

ジュールダン それで、これらを合わせると四六〇ルイになります。

ドラント その計算は実に正確です。四六〇ルイ。

ジュールダン あなたの帽子屋に一五〇ルイ。

ジュールダン夫人 ツツツツ（舌先を歯茎につけて吸うようにして出す舌打ち）！
ジュールダン 下品なことするんじゃない、お前。

ドラント 確かに。

ジュールダン あなたの仕立屋に五〇ルイ。「ジュールダン夫人がため息をつき、ジュールダンは夫人を蹴飛ばそうとする」

ドラント そのとおりです。

ジュールダン あなたのメリヤス屋（靴下・カラー・男性用下着類を売る）に三九〇ルイちよっと。

ドラント 実に正確です。ちよっとまでとは。その計算は正しい。

ジュールダン それに、あなたの鞍作り屋に一五〇ルイ。

ドラント すべて正確です。おいくらになりますかな？

ジュールダン 合計、一四〇〇ルイです。

ジュールダン夫人は気を失いそうになる。

ドラント 合計は正しい。一四〇〇ルイだ！ これからいただく二〇〇ルイを加えるところ、ようど一六〇〇になります。最初の機会にお返しするつもりです。「立ち上がつて椅子を元のところに置く」

ジュールダン夫人 「ジュールダンに傍白」ほら、わたしが言ったとおりでしょ？

ジュールダン 「傍白」シッ！

ドラント それだけいたただくのはご都合が悪いですか？

ジュールダン ちつとも。「立ち上がりかける」

ジュールダン夫人 「ジュールダンに傍白」この人はあなたを金づるにしているのよ。

ジュールダン 「傍白」黙れ！

ドラント もしご都合が悪ければ、どこかほかへ借りに行きますが。

ジュールダン いや、そんな、あなた！「優雅に椅子の背もたれを乗り越えようとするが、

椅子が離れない」

ジュールダン夫人 「傍白」この人はあなたが破産するまで満足しないでしょうね。

ドラント ご迷惑かどうかだけ言ってくださいね。

ジュールダン ちつとも！「わざわざそうするかのように背もたれにもたれる」

ジュールダン夫人 「傍白」この人は根っからのたかり屋だわ。

ジュールダン 黙れ！

従僕がジュールダンから椅子を取り払う。

ジュールダン夫人 「傍白」この人は最後のルイまでせびるつもりだわ。

ジュールダン 「傍白」黙らんか！

ドラント 喜んでわたしにお金を貸してくださいる方は大勢いますが、あなたにはわたしの親友ですから、ほかの方にお願するのは、あなたに対してひどい仕打ちをすることになるだろうと思わせてね。

ジュールダン とても光栄に思います、閣下。お望みのものを持って来ましょう。

ジュールダン夫人 「傍白」また渡すつもりじゃないわよね？

ジュールダン わしにどうしろというんだ？ 今朝、謁見の儀でわしのことを話してください。さったような地位にある方を断われというのはか？ 従僕ども！「何度もお辞儀をしてドアに突き当たる」

従僕たち 旦那様！「二人とも従う」

ジュールダン夫人 「傍白」冗談じゃない、あなたは正真正銘のカモだわ！

ジュールダンと従僕たち退場。

ドラント 憂うつそうですね。どうかなさったんですか、ジュールダン夫人？

ジュールダン夫人 わたしの頭は拳より大きいのですが、ふくらますことができないもので。

ドラント ところで、おたくの素敵なお嬢さんが見えませんが、どこにいらっしやるんですか？

ジュールダン夫人 うちの素敵なお嬢が見えないのは、見えるところにはいないからですわ。

ドラント どのようにお過ごしでしょうか？

ジュールダン夫人 両足で立っています。

ドラント 近い内にお嬢さんと一緒に宮廷で催されるバレエと芝居を観にいらっしやるいませんか？

ジュールダン夫人 ええ、はい、笑えることがたくさんあるですよ？ 笑えることがたくさん。

ドラント あなたは美しく感じていい女性だったに違いありませんね、ジュールダン夫人。若い頃は求愛する者がたくさんいたことと思います。

ジュールダン夫人 失礼な！ジュールダンの家内はよぼよぼで、寄る年波で頭をぐらつかせてるっておっしゃるの？

ドラント これはこれは、失礼でしたか、ジュールダン夫人？ あなたがお若いということとを忘れておりました。わたしは時々うっかりするもので。どうかお許しを！

ジュールダン氏登場。

ジュールダン 従僕ども！

従僕たち登場。

ジュールダン 確かにこちらに二〇〇ルイございます。

ドラント 確かに、ジュールダン殿、大変かたじけない。ぜひ宮廷であなたのお役に立つことをしたいと思います。

ジュールダン ありがとうございます。

ドラント 「ジュールダンに傍白」手紙でお知らせしたとおり、例の美しい伯爵夫人が夕食とダンスのためにもうじき来ます。あなたがしたがっているもてなしを、わたしがやっと受け入れさせたいんです。

ジュールダン もう少しあっちへ行きましょう。事情がありました。

ドラント 一週間あなたとお会いしていなかったもので、あなたからだといって彼女にプレゼントするよう託されていたダイヤモンドのことをお知らせしておりませんでした。ですが、彼女がためらうのを説得するためにわたしは四苦八苦ししましたが、今日になってやっと彼女は受け取る決心をしました。

ジュールダン 気に入ってもらえましたか？

ドラント それはもう！ あのダイヤモンドの美しさをもってして彼女に大した効き目がないとしたら、わたしは大きな間違いを犯しているということになります。

ジュールダン 効き目があると本当にいいのですが。

ドラント あなたは彼女の心を動かすのに正しい道を選んだんです。女というのは自分のためにお金をかけてくれる人間が大好きです。あなたがたびたび捧げるセレナーデとか、あなたが彼女に送るいろいろな花とか、彼女があなたから受け取ったダイヤモンドとか、あなたが彼女のために準備しているもてなしとか——あなた自身が口で言うよりも、愛のためにはそういうものの方がずっとものを言えます。

ジュールダン そうか、ダイヤモンドはものを言うんだ！ ほう！ 彼女がわたしを愛するようになるためだったら、わたしはどんな出費も惜しみません。わたしにとって、爵位のある女性には思わず惚れてしまうような魅力がありますから、いくらかかるかと買うのは光栄なことなんです。

ジュールダン夫人 「ニコルに傍白」あの人たちは二人してあんなに長いこと何を話しているのかしら。こっそり聞いてらっしゃい。

ドラント ですから、もうすぐあなたも安心して彼女と会う喜びを実感できることでしよう。

ジュールダン 邪魔が入るといけないので、わたしは、妻がわたしの妹のところへ食事に行つて、午後はそこで過ごすよう手筈を整えました。

ドラント 賢明なことをなさいました。奥さんは邪魔になつたかもしれません。コックには、あなたに代わつてわたしが必要な指示を与えておきましたし——

ジュールダンはニコルが聞いているのに気がついて、横つ面を殴る。

ジュールダン こらっ！ 生意気なあばずれめ！ 「ドラントに」よろしければ、ここを出ましょう。

ドラント あれは何ですか？

ジュールダン オペラのリハーサルの音です、トロンボーンの音が聞こえませんか？ 「ジュールダン夫人に」お前はわしの妹のところに行く予定だろうが、我々は音楽を聴きに行くつもりだ。

ドラント わたしは彼女を連れてまいります。

ジュールダン氏とドラントは歌いながら出て行き、従僕たちも従う。

ニコル やれやれ！詮索好きなために分かったことがあります。でも、その裏には何か怪しいことがあります。奥様には関わってもらいたくないようなことをあれこれと話していました。

ジュールダン夫人 主人が怪しいと思ったのはこれが初めてじゃないの。わたしが騙されているのでなければ、主人は浮気しているんだから、何としてもその正体を見つけて出すつもりよ。

(原文ではここに Enter LUCHILE, M. JOURDAIN's daughter. She goes up to her mother.とあるが、訳者の判断でカットした)

でも、娘のことを考えましょう。クレオントが娘に恋しているの。彼はわたし好みの人だから、助けてあげたいわ。できることなら、ルーシーはあの人にあげたいものね。

ジュールダン再登場。二人に近寄って来る。

クレオントに会ってすぐ来るように言ってきたちょうだい、そうすれば、一緒になって夫に娘を彼にあげるよう頼めるから。

ニコル退場。

ジュールダン 娘はあいつにふさわしくない。

ジュールダン夫人 どうして？

ジュールダン あいつは名門の出ではないからだ。あいつに娘はやらんぞ。娘の持参金は十分にある。唯一必要なのは階級で、わたしは娘を伯爵夫人にするつもりなんだ。

ジュールダン夫人 とんでもないわ！

ジュールダン もうわしが決めたことだ。

ジュールダン夫人 そんなこと、絶対に賛成できないわ。わたしは義理の息子が娘に両親のことで恥ずかしい思いをさせるなんてことしてほしくないし、娘にはわたし

わたしが望むのは、娘のことをわたしに感謝してくれる人だわ。そして、義理の息子に向かって、「そこに座って、わたしの息子、ささやかな夕食と一緒に食べなさい」って言うようになりたいのよ。「時計が三時を知らせる。ジュールダン夫人は立ち上がる」あなたの妹さんのところへ行ってきました。「退場」

ジュールダン ああいうのは、ずっと卑しい身分のままでもいいという狭い考えにすぎない。みんなが何と言おうと、わしの娘は伯爵夫人になるんだ。「立ち去る」

舞台には誰もいない。そう思っていると、ジュールダンが戻って来る。

従僕三 「ドアのところで」伯爵様がお越しです、旦那様、ご婦人がご一緒です。

ジュールダン 大変だ！ 言いつけておきたいことがある。あの方たちに、わしはすぐま
いりますと伝えてくれ。「退場」

ドラントとドリメーヌが入って来る。

従僕三 「ドアの側で」ご主人様はすぐまいると申しております。

ドラント よろしい。

従僕は出て行く。

ドリメーヌ 知り合いのいない家に連れてこられるなんて、わたし、おかしなことをして
るんじゃないかしら。

ドラント 注意を引かないようになって、あなたの家でもわたしの家でもおもてなしさせて
いただけないので、わたしはどこであなたをおもてなししたらいいん
ですか？

ドリメーヌ でも、あなたは、ご自分のあまりにも確固とした情熱を毎日受け入れるよう
少しずつわたしに誘いかけてお忘れだわ。わたしが抵抗しても無駄
で、あなたはわたしの抵抗力を消耗させて、ご自分の持っている優雅なしつこ
さで段々とわたしを好きな方向に仕向けてしまう。何度も訪ねて来ることから
始まって、愛の告白になり、その後にはセレーヌやおもてなしやプレゼントが
続いた。わたしは全部拒否したけど、あなたはめげもせず一步一步わたしの
決心を打ち負かそうとしている。わたしにはもう対応のしようがありませんか
ら、きつと最後にはわたしを結婚まで持つて行くんでしょね。わたしは本当
に結婚しないと心に決めていたんだけど。

ドラント 「ドリルメーヌの後ろに横切って行き、席に着いて座る」いやいや、あなたは
もう結婚する気になっているに違いありません！ あなたは未亡人で、ご自分
以外の誰にも頼っていない。わたしは自由の身ですし、自分の命よりもあなた
を愛しています。今日という今日、あなたがわたしを幸せにするのに何が邪魔
なんですか？

ドリメーヌ あらまあ！ 一緒に幸せに暮らすためには、双方に必要な要素がたくさんあ
るわ。そして、最も分別のある二人の間は、しばしばお互いに満足のいく結
婚の形を作るのが難しいことに気づくものよ。

ドラント 結婚するのに難しいことをたくさん考えてみるのは馬鹿げていますし、あなた
が試してみたことがほかの人間全部にとって決定的なものではありません。

ドリメーヌ とにかく、わたしはいつもそのことに立ち戻るんです。あなたがわたしのた
めに使うお金のことを考えると、二つの理由で心配です。一つには、わたしが

好む状況を超えて抜き差しならなくなるから。もう一つには、確かだと思うけど、そう言っても構わなければ、あなたがお金を使うと必ずあなたに迷惑がかかるから。わたしはそんなこと望みません。「立ち上がって、ドラントに触れる」

ドラント そんなことはささいなことですし、そのためじゃなくて――

ドリメーヌ 自分が言っていることぐらい分かっていますわ。それに、数ある中でも、わたしに無理やり下さったあのダイヤモンドはとても高価ですから――

ドラント お願いですから、高価だからといって何かわたしの愛があなたにふさわしくないみたいなのに結びつけないでください！ そして、お許しください――

従僕登場。

この家の主人が来ました。

ジュールダン氏が入って来て二度お辞儀をし、三度目のお辞儀をするにはドリメーヌが近すぎるのに気づく。この場面の間、ドラントとドリメーヌはジュールダンを礼儀正しくも皮肉な調子をもって扱う。

ジュールダン ちょっと離れてください、奥方。

ドリメーヌ 何ですって？

ジュールダン 一步だけ、すみませんが。

ドリメーヌ どういうことですか？

ジュールダン 三度目のお辞儀のためにちょっと下がってください。

ドラント ジュールダンは礼儀作法をご存じで。「舞台後方へ行く」

ジュールダン 「咳払いをする」幸運にも、奥方からご親切にもお越しいただく栄誉を与えていただく親切を与えていただくご好意を寄せていただくという幸福を得るほど幸福だということは、わたしにとって大変光栄なことです。「額を拭う」ハア！ そして、もしわたしにも奥方のように長所に値する長所があつて、神が――わたしの幸運を羨ましく思つて――わたしに認めてくださったのが――その幸運に値するという長所ならば――

ドラント もういいでしょう、ジュールダン殿。奥方は念の入った挨拶は好きじゃないし、あなたが有能な方だということはご存じです。「ドリメーヌに」奥方、こちらにはわたしの大親友です。

ジュールダン 身に余る光栄です。

ドラント 完璧な紳士なんです！

ジュールダン あなたこそ。

ドリメーヌ わたしも大いに敬意を表しますわ。「座る」

ジュールダン そのようなご好意に値することはまだ何もしておりませんが。

ドラント 「ジュールダンに傍白」何をするにしても、あなたが差し上げたダイヤモンドのことは言わないように気をつけるんですよ！

ジュールダン 「傍白」どう思ったのか、ちょっとだけ聞いちゃいけませんか？

ドラント 「傍白」おやおや、そんなこと考えちゃいけません！ そんなことしたら下品だと思われるでしょうし、紳士らしく振る舞うためには、あのプレゼントを贈ったのはご自分ではないというふうに振る舞わなければ。「ドリメーヌに声高に」ジュールダン殿は、この家でお会いできて光栄だとおっしゃっています。

ドリメーヌ それはご親切様。

ジュールダン 「ドラントに傍白」わたしに代わってそんなふうに話して下さってありがとうございます。

ドラント 「傍白」奥方ここに來ていただくのには大変苦労しました。

ジュールダン どんなに感謝しているか分かりません。

ドラント 「ドリメーヌに」この方はあなたが世界中で一番美しい方だとおっしゃっています。

ドリメーヌ そう言っていたらご親切様。

ジュールダン 奥方「ドラントの足を踏む」、あなたこそ、願いを聞いてくださって――

ドラント 食事にしましょう。

従僕三 すべて用意が整っております、旦那様。

宴会の用意を済ませたコックたちが一緒になって踊り、踊り終わるといろいろな料理が載ったテーブルを運んで来る。三人は座る。

ソースを……添えた……サーモンです。

ドリメーヌ 本当に、これは実に素晴らしい食事だわ！

ジュールダン いえ、どういたしまして、奥方、もっとあなたにお出しするのにふさわしいものだとよかったです。

ドリメーヌ わたしのいただき方でお答えするしかありませんわ。

ジュールダン 召し上がり方も美しい。

ボルドーのワインを添えたイタリア風のマトンの脚。従僕がジュールダンに料理を見せる。

ジュールダン 女性が先だ！ ああ、何と美しい手だ！

ドリメーヌ 手は自慢できるほどのものではありませんけど、ジュールダンさん、あなたはダイヤモンドのことをおっしゃっているんですよ。素敵ですもの。

ジュールダン わたしですか、奥方？ わたしがダイヤモンドのことを言うなんて、とんでもない！ そんなこと、紳士らしくありませんし、そのダイヤモンドは大きなものではありません。

ドリメーヌ あなたを喜ばせるのはとても難しいのね。

ジュールダン あなたこそとても親切で……

ドラント ほら、どうぞあの美しい曲を聴いてください！

ドリメーヌ 何て素敵なこと！「音楽」この曲はすごく合ってるわ――まるでツグミとヒ

バリがしゃべっているみたい！ 本当に美しいわ！

ジュールダン わたしはもつとずっと美しいものを見ています。
ドリメーヌ あらまあ、ジュールダンさんは思っていたよりも女にお世辞をおっしゃる方
なのね。

ドラント ジュールダン殿のことをどうお思いですか？

ジュールダン もしわたしが自由の身でしたら、名前をはっきり言える者だと思っていた
だきたいです。ハハハ！「げっぷをして謝る」

ドリメーヌ またですか？

ドラント あなたはこの方をご存じない。

ジュールダン わたしをお好きなら、いつでもお知りになれますよ。

ドリメーヌ ああ、もう降参です。

ドラント こちらはいつでも当然即妙の技をすぐ使える方です。

従僕登場。

従僕 びっくり風オムレツとポルトガルのワインです。

踊りの後。

ドラント 今の踊りが何を表現しているか分かりますか？

ドリメーヌ 説明するまでもないと思いますけど。

ドラント お気に召さなかったところがあるんですか？

ドリメーヌ あら、そんなこと言ってませんわ！

ジュールダン 「上手に腰を振って」、「男の服を着た女の子」ですが、わたしがお見せで
きるものとは比べものになりません。

ドラント ジュールダン殿がおっしゃっているのは陽気なエピソードのあるオペラのこと
で――

ジュールダン うちの天才的な若い作曲家――つまり、わたしがかかえている作曲家が作
りました。

ドリメーヌ オペラを――この家で？

ジュールダン もちろんです！ 爵位のある方は皆さんそうするんじゃないんですか？

ドリメーヌ オペラだなんて！ 花火もあるんですか？

ジュールダン 花火も正式なんですか？ それなら、間違いなく、うちの作曲家だって音
楽に合わせて花火を取り入れるでしょう。

ジュールダン夫人が急ぎ込んで入って来る。

ドラント いやはや、これがオムレツとはびっくりだ！

ジュールダン夫人 あらまあ！ 皆さん楽しそうで、でも、わたしはお呼びじゃないのは
分かってます。しきりにわたしを妹さんのところへ食事に行かせたがったのは

この結構な用事のためなのね。これがあなたのお金の使い方だわ。こんなふう

にして、わたしがいない時に女性にご馳走したり、わたしを追い出しておいで音楽やなんかを供するのよ！

ドラント どういうことですか、ジュールダン夫人？ そのようにご主人がご自分のお金を使っているとか、こちらのご婦人に食事を供しているのがご主人だとお考えになるのはどういう思いつきですか？ よろしければ、言わせていただくのと、それはわたしなんです。ご主人はこの家を貸してくださってるだけですから、本当にもう少しご自分のおっしゃることに気をつけていただかなければ。

ジュールダン 失礼だぞ、爵位のある奥方にこれを供しているのは閣下なんだ。閣下は光栄にもわしの家を借りてくださって、体裁をよくするためにわしに同席を望んでいらっしゃるんだ。「ドリメーヌにお辞儀する」

ジュールダン夫人 そんなことみんな、馬鹿げてるにもほどがあるわ！ わたしはちゃんと知っているのよ。

ドラント もっといい眼鏡をかけなければいけませんよ、ジュールダン夫人。

ジュールダン夫人 眼鏡なんか必要ありませんわ、閣下。十分はつきり見えますから。以前からずっと、何か変だと思ってたのよ。わたしだって馬鹿じゃありませんもの。あなたのような立派な紳士が主人の馬鹿なまねに手を貸すなんて恥ずべきことです。それに、あなた、奥様だって、高貴な婦人が家庭に迷惑をかけて主人を惑わすなんて見られたもんじゃやないし不誠実ですわ。

ドリメーヌ これはどういうことですか？「ドラントに」本当に、わたしをこの馬鹿な人の馬鹿げた妄想にさらされては困ります。「出て行く」

ドラント 「ドリメーヌを追いながら」どこにいらっしゃるんですか？

ジュールダン 奥方、美しい方！ ああ、閣下、奥方にわたしのことを詫びて、連れ戻してください。「妻に」この無礼なあばずれが！ 結構なことをやってくれたな！ みんなの前でわしを侮辱して、爵位のある方たちをこの家から追い出したんだぞ。

ジュールダン夫人 爵位なんか知るもんですか！

ジュールダン どうしてお前がぶち壊しに来た食事の残り物でお前の頭を叩かないのかわれながら不思議だ！

ジュールダン夫人 「出て行きながら」知るもんですか。わたしは自分の権利を守っているものであって、女はみんなわたしの味方になってくれるわ。「退場」

ジュールダン お前がどいてくれたのは賢明だ！「独白」あいつも間の悪い時に入って来たものだ！ 素敵なことを言いたい気分だったのに。わしはあれほどご馳走がいっぱいだと感じたことはなかった。ご馳走と言え、食事を終わらせるとしよう。従僕！

幕